鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学･社会科学編 第3号　2020

新体詩における画期としての1886年
―明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(17)―

大本　達也

要旨

新体詩にとって1896年は画期となる年である。それは第1に「軍歌」が登場すること、第2に「色・恋」を主題とした作品が誕生すること、第3に愛好者の広がりが見られることによる。本稿では『新体詩林』、『書生唱歌』、『新体詞選』、『纂評・新体詩選』、そして新体詩学研究会が刊行した諸書籍の考察を通じて、第2、第3の要因を確認する。

キーワード

新体詩学研究会、『新体詩林』、『書生唱歌』、『新体詞選』、『纂評・新体詩選』

凡例

・本論中、敬称は省略する。
・大本による注釈は（　）で示し、引用は《　》で示す。
・下線はすべて大本による。
・出典は、ページが付されている紙・電子媒体の書籍や論文の場合［編著者名/出版年:ページ数］で示す。なお、「国立国会図書館・デジタルコレクション」からの引用は[編著者名/出版年:コマ数]、「国文学研究資料館」からの引用は[編著者名/出版年:画像番号]とする。
・読みやすさに配慮し、旧字体漢字は新字体に変え、難読字にはひらがなルビを付す。原典のルビは必要と思われるもののみ残し、カタカナで示す。
・「明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論」シリーズは、鈴鹿大学HPおよび大本の開設するHP「大本達也の研究室」(http://www65.atwiki.jp/omototatsuya/)からダウンロードできる。後者には正誤表も順次掲載する。

はじめに

各論4では詩歌論を扱う(注)。各論4-7である本稿は、各論4-5「美妙・山田武太郎『少年姿』あるいは「男色」―明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(15)」、各論4-6「1886年における「軍歌」の誕生―明治期における「文学」の形成過程をめぐる国民国家論(16)」にひき続き、1886(明治19)年における新体詩の動向を探り、この年を総括する。

明治に至り、欧米文化が大量に流入してくることにより日本文化は大きく変化する。「文学」もその例に漏れない。国民国家(Nation States)体制の世界において、国家語(National Language)で書かれた“National Literature”は文化の精華であり、それまで漢籍を中心とする学問を意味していた「文学」は、明治に入り“literature”の訳語である現行概念へと移行していく。漢詩を意味してきた「詩」も同様で、明治を通して徐々に“poetry”の訳語として定着していく。

“poetry”概念導入の皮切りとなったのが、1882(明治15)年発刊の外山正一他編『新体詩抄・初篇』(以下『新体詩抄』)である(各論4-2参照)。日本語による“poetry”を「新体詩」と名付け、新たに船出した国民国家・日本の華として育てていくことを提唱し、実践を開始する。

以後、その理念を受け継いだ新体詩関連書籍が刊行されるが(各論4-3、4-4参照)、新体詩史上ひとつの画期となるのがこの1886年である。

その理由はまず、河井源蔵版『軍歌』が出版され、翌年末まで50点を越える類書が刊行されることである。以後、明治を通じて新体詩と軍歌は同一視されていき、やがて軍歌は別ジャンルとして独立していく(各論4-6参照)。

次に、『新体詞華・少年(わかしゅ)姿』(以下『少年姿』)における主題としての色・恋の導入である(各論4-5参照)。和歌において色・恋は重要な主題であったものの、日本文化の精華としての“poetry”の確立をめざす新体詩においては、漢詩的品格が意識され、色・恋は低俗な主題として忌避されてきたが、この年、はじめて導入される。

本稿では、1886年に発行された軍歌および『少年姿』以外の書籍を検討し、そのあと両者をあわせて新体詩上において、この年の持つ意義を考える。

1. 『新体詩林』

雑誌『新体詩林』は、1885(明治18)年から翌年にかけて6号まで大阪で発行される。編者は第1号から4号は小川平吉(政治家の小川平吉〈1869-1942〉と同一人物か)、第5号は未確認。第6号の編者は首藤文雄、編著書に『棉花輸入税廃止理由書』(1892)、『郡市町村・治績類纂』(1903)、『大阪案内』(1909)などがある。

第1号「社告」に《原稿ハ之ヲ甲乙丙ノ3等ニ区別シ》《其取捨選択ハ編者ニ一任セラレザル可ラズ》とあるように、一般から広く投稿を募る体裁をとる[小川 1885a:3]。WEBSTERの *The Elementary Spelling-Book*(1885)に広告を出していることから、その対象が洋学に関心を持つ若者層であることがうかがえる[Webster1886]。またこの「社告」からは、当時における新体詩の受容様式が3点確認できる。

まず、唱歌との融合である。《此新体詩ハ三味線ノ二上リニモヨク合フモノナレバ願クハ鬱余之ヲ試ミラレンコトヲ才子佳人ニ希望ス》とあることから[小川 1885a:3]、新体詩は声に出して歌われることが普通だったことが確認できる。

およそ10年後の独歩・国木田哲夫（1871-1908)の「独歩吟序」(1897)においても、《嗚呼詩歌なき国民は必ず窒塞す》《歌へよ、吾国民》《人をして歌はざる情熱に駆られて歌はしめよ》《吾国には漢詩を直訳的に朗吟する習慣あり》《余は此習慣を新体詩の上に利用し発達せしめんことを希望するもの也》と実際の歌唱が想定されている[百田 1929:14-5]（各論4-2参照)。朗誦されるものとしての新体詩は唱歌との融和性が高く(各論4-1参照)、以後長く両者は同一視される(各論4-6参照)。

次に、「はじめに」で触れた新体詩と軍歌との一体化である。「社告」に《外山先生ノ傑作ニカカル抜刀隊ノ詩ノ如キハ今度我国ノ軍歌ト定メラレタルモノ》ともあるように[小川 1885a:3]、「抜刀隊」のような忠君愛国が当時の新体詩の中心的主題である。そして、その忠臣愛国を中核としたことが新体詩流行の要因のひとつである以上、必然的に軍歌と新体詩は同一視されていくことになる(各論4-6参照)。この年から新体詩と軍歌の一体化が始まったわけだ。

ところで、先の *THE ELEMENTARY SPELLING-BOOK* の広告には、《東京大学教授外山ゝ山(正一)、矢田部尚今(良吉)、両先生ガ新ニ泰西ノ新体ニ倣ヒ通常ノ言語ヲ用テ創唱サレレタル者ニシテ》とあり[Webster1886:2]、この雑誌が『新体詩抄』の趣旨を引き継ぐものであることが確認できる(各論4-2参照)。具体的には、次の2点が継承されている。

第1に作品の長さである。第6号巻末の「新体詩作例大意」には、従来の《唐詩(漢詩)和歌等》では《如何ナル詩歌ノ達人ト雖モ充分ニ思想ヲ述ベ尽スコト能ハサル》ため、《連続セル感情思想ヲ充分ニ表白シ以テ文運ノ進歩ヲ助クル》ことが肝要であるとある[首藤 1886:3]。さらに、《詩句ノ長短亦作者ノ随意タリト雖モ其短キ者ハ意必ス浅シ長クシテ意深ク読者ニ感動ヲ与フルヲ勉ムベシ》とも強調される[同:4]。

ここで提唱されていることは『新体詩抄』において外山が指摘した《三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り尽すことの出来る思想ハ、線香烟花(花火)か流星くらいの思に過ぎるべし》という和歌批判を反映したもので[外山 1885:6]、新体詩には長さを有する作品によりある種の思想を表現することも期待される。この思想・評論を新体詩とする形式は外山が『新体詩抄』の「社会学の原理に題す」で初めて試みたもので(各論4-2参照)、この各論4シリーズではそういった新体詩を論説詩と総称する。

第2に用語の平易さである。先の「新体詩作例大意」に《唐詩和歌ノ如ク古事古語ヲ引用シテ徒ラニ読者ヲ苦シマシムルヲ忌ム》とあり[首藤 1886:3]、読者に分かりやすい言葉の使用が推奨される。先に引いた *The Elementary Spelling-Book* の広告に《泰西ノ新体ニ倣ヒ通常ノ言語ヲ用テ創唱サレレタル者ニシテ》とあったが[Webster1886:2]、この《通常ノ言語》を用いることは『新体詩抄』における方針の継承であり、井上哲次郎の《今之詩。用今之語》という言葉や[外山 1885:2]、矢田部良吉の《我邦人ノ従来平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少ナキヲ嘆シ》という発言[同:4]、そして外山の《人に分かるが専一と、人に分かると自分極め、易く書く》[同:7]といった主張を踏まえる。

では以下、各号ごとに内容を紹介する。

1.1 第1号

1885年10月刊。「緒言」自体が七五調の論説詩となっている。《判らぬ古事を担(かつぎ)き出し》たり、《通らぬ古語を持ち》いたり、《入らざる韻事や平仄》を用いたりする《お手軽さま》な存在であると漢詩や和歌を退けつつ、《連続したる思想をば/うなり出す事なるならば》と、平易かつ思想性のある新体詩を求める内容となっている[小川 1885a:4]。

また、《凡そ詩や歌俳諧と 名にこそ種々のちが(違)ひあれ/元を質(ただ)せば一様に》《人の心を感ぜしむ 学芸なりと知られけり》と、漢詩・和歌と新体詩を同一のジャンルと見なす先見性も見られる[同]。

掲載されている作品は4篇で、うち「抜刀隊」「グレー氏墳上感懐の詩」「チヤールス、キングスレー氏悲歌」の3篇が『新体詩抄』からの転載である。

残る1篇は、山形県人・大岡陽太郎の「擬代悲白頭詩」である。《年年歳歳花相似/歳歳年年人不同(年年歳歳 花相似たり/歳歳年年 人同じからず)》[関西]で知られる唐代詩人・劉希夷(651－678?)の「代悲白頭翁」に擬した作である。なお、同種の詩に『新体詩歌』第4集収録の大竹美鳥の「代悲白頭翁歌」がある(各論4-3参照)。

《杖にすがりて其むかし/舞ひつ謡ひつせし野辺を たそがれ時に眺むれば/それとも知らぬ鳥の音の いともあわれに聞ゆなり》[小川 1885a 同:6]。

1.2 第2号

1885年11月刊。「勧学の歌」「テニソン氏軽騎兵隊進撃の詩」は『新体詩抄』からの転載である。また大岡が「トーマス、グレイ氏の伝」として、英国詩人・トーマス=グレイ(1716～1771 Thomas Gray)に関する作品を書いている[小川 1885b:2] 。グ連載物であるが、第3号[小川 1885c:3]および第4号[小川 1886:3]では紙数の都合で休載、第6号にも掲載されていない(第5号未確認)。

次に、竜渓・矢野文雄 (1851-1931)の政治小説『経国美談』(1883-4)より「春の花」が転載される。原本が確認できないため『経国美談』から引く。《見渡セハ(ば) 野ノ末、山ノ端(ハテ)マデモ 花ナキ里ソ(ぞ)ナカリケル 今ヲ盛リニ咲キ揃フ 色香愛(めで)タキ其花モ 過キ越シ方ヲ尋ヌレハ(ば) 憂キコトノミゾ大カリキ》 [矢野 1884:123]。

それから、勝海舟(1823-99)の「西郷追慕の歌」が掲載されている。後述する『纂評(さんぴょう)・新体詩選』に掲載されている「薩摩琵琶歌」と同一であるため、詳細はそちらに譲る。

他に、鳥取県人・吉邨秀蔵の「薄命の歌」、大阪人、一山居士こと首藤の「女子を励ます詩」がある。なお、首藤は6号では編集を担う。

1.3 第3号

同年12月刊。『新体詩抄』から「ロングフェロー氏玉の緒の歌」「高僧ウルゼーの詩」「春夏秋冬」の3篇、『兵事新聞』から立見尚文(1845-1945)の「軍旗の歌」、『青森日々新聞』から青森県人・鉄石居士の「攪眠歌」が転載される[小川 1885c:2]。

他に秋田県人・安藤和風(はるかぜ)(1886-1936)の「人の東都に之を送る」が載せられている。俳人でもある安藤は1882(明治15)年に秋田日日に入社、翌年、秋田日報に転じ、後に《その名はつとに中央新聞界に聞こえ》、《秋田の代表的言論人として君臨》する［春原:147]。

巻末には首藤による「新体詩林発行の祝詞」が付されている。

1.4 第4号

1886年1月刊。「テニソン氏船将の詩（英国海軍の古譚）」は『新体詩抄』からの転載である。茨城県人・中尾清三郎の「ウヲータル　スコット氏「エッリック」野ノ十一月詩」、大阪府人・島村清吉の「童子の詩を悼む詩」、首藤の「題明治乙酉摂河二州洪水」が掲載される[同]。新潟県人・蘭竹居士の「一月元旦」は、《春は来にけり新玉に 明治もここに十九年/過し憂こと打ち払へ 人のこころもあらたまり/年の始の元始祭(げんしさい)(宮中で行われる天皇の親祭)》と始まる[小川 1886:2]。

1.5 第6号

首藤編、同年4月刊。「カムプベル氏英国海軍の詩」「鎌倉の大仏に詣でゝ感あり」の2篇が『新体詩抄』から転載される。

まず、秋田県人・塚越由松が「軍人の歌」と「破夢の歌」がある。後者を引く。《頭につもる白雪は 春はく(来)れどもき(消)へなまし/面によ(寄)せる年波は 年はかへ(返)れどかへ(返)らまし》《明日を定めぬあだし身を/不死と頼むは愚かなれ》[首藤 1886:2]。

また、高知県人・土井通豫の1連5行の「賞友堂主人を送る詩」は、《硯の海に波立たせ 言葉の枝に花咲かせ》と始まり、《生死を共に盟(ちか)ひつる 友と今宵は別るなり》と続き、《雲間に叫ぶ郭公(ホトトギス) 声も涙に濡るるべし》と終わる[同:3]。

それから、安藤による「自由の歌」がある。、これは《人の上には人はなく 人の下にも人はなし》《命に換えて大切は 平等自由の権なるに》といった詩で［柳田 2005:378]、柳田泉は同じ自由民権運動を背景にした屈山・小室重弘の「自由の歌」と比較すると(『新体詩歌』第1集収録、各論4-3参照)、《屈山の方が情熱的であり、音響も強いが、詩体としては、楢山の方が、後から出来ただけに整つてゐて、唱歌よりも新体詩に近いものとなつてゐる》とのことである[同:380]。

他に、首藤の「秋の夜の雨」がある。

2. 新体詩学研究会

1886年、茨城の水戸に有朋社が設立され、4月に新体詩の同人誌『有朋志叢』を創刊す

る[野呂 1996:13]。そして、その別冊付録として4月に『新体詩学必携』を、6月に『新体詩格・愛国美談』を刊行し、8月(「合本御届」は6月)には合本として『新体詩学必携/新体詩格・愛国美談』(新体詩学研究会編、内田鶴吉出版)を発行する[村上 1976:18-9]。

7月には内田編、同会校訂の『学歌』を刊行する。他にも同会および会員の編著書として、翌年刊の同会編『新体・勧学歌』と内田編『小学新選唱歌』があるが、これらは稿を改めて論じる。

本間久雄は《「新体詩学研究会」といふものが茨城県下の一地方に設立されたといふ事実から見ても、新体詩といふものが―その七五調に依つて、いかに当時一般化してゐたかを見るべきである》としている[本間 1937:68]。先に見た『新体詩林』も大阪で発行されており、新体詩作者の出身地は全国各地にまたがる。本間の指摘どおりこれらの書籍の地方出版は、新体詩の愛好者が全国に広がることの証左である。

2.1 合本『新体詩学必携/新体詩格・愛国美談』

七五調3段組1連36行の論説詩の形式で書かれた「新体詩学研究会設立主意」がこの合本の巻末に置かれる。内容は以下である[山口 1886:46-8]。

《詩は文学の一分野にて 自身からなる価格持ち 東西国を異にして/風俗言語変われども 往昔よりして学びにて 気高き地位を占たるは/歴史に照し著るし》、詩は東西ともにそれ自身価値の高い存在であるが、今ここに漢詩に《三行半の絶縁状》を渡し、代わりの《花嫁》として新体詩を迎える。ただ、《未だ日の浅く充分に/発達せしにあらざれば》新体詩は未熟なため、《我々共に相り 一の会社を打ち立てて》意見を募り、《我皇国の詩の学の光り輝く成果を》世に問うことが《唯我国の為》である。《燃る思の人々》は《共に来りて合体し 其方法に尽力》することを求める。

野呂芳信はこの設立主意について、《西洋を範とした改良主義とナショナリズムとの交錯した意識》が見られると評する[野呂 1996:14]。さらに、『新体詩学必携』と『新体詩格・愛国美談』が合本として刊行される理由について、《前者が理論の書だとすると、後者は実勢の書だったのではなかろうか》としたうえで[同:20]、この合本は《愛国的意図のもとに文明発展の一つの手段として『新体詩抄』を継承し、かつそれを主に形式面で発展させようとするものである》とする[同:22]。

2.1.1「新体詩学必携」

著者は中川清次郎(?-1943)、著書にはマルコ=ポーロから黒船来航に至るまでの日本と西洋のかかわりを追った『西力東漸史』(1898)、第2次世界大戦にまで言及する増補改良版『西力東漸本末』(1943)などがある。

『新体詩林』第6号の広告に、《本書(『新体詩学必携』)ハ我国ポエトリーノ作法書ナキヲ憂ヒ先生得意ノポエトリーニテ作法ヲ著述セシ良書ナリ》とある[首藤 1886:5]。藤田

徳太郎はこの書を《新体詩学の最初の書》と評する[藤田 1939:272]。

本文全体が七五調2段組で書かれた論説詩となっている。本間は《この書の存在の意義は、その内容にあるのではなく》《新体詩といふものを説明するために七五調を用ゐたところにあるのである》とそれを肯定的に評価する[本間 1937:68]。

一方、「社会学の原理に題す」に始まる論説詩を《ただこと詩》と呼ぶ山宮允は、後に触れる《殊に外山の先生の…》[中川 1886:6-8]という本文の一節を《片言的ただこと詩》となじったうえで、《政治思想の宣伝、知識の弘布、教訓教化を目的として企てた》論説詩や教訓詩は『新体詩抄』の模倣に過ぎず、《新詩の普及興隆に若干間接の寄与はした》とはいえ、小室の「自由の歌」と植木枝盛の『自由詞林』(1887)以外は《見るに足るもの》はないと結論づける[山宮 1950:454-5]。

この国民国家論では作品の良否には踏み込まず、新体詩形成史における意義を問題とする。それゆえ「新体詩学必携」については、外山が「社会学の原理に題す」で行った論説詩という新体詩上の実験が支持され、ついに1冊の本を生み出すに至ったという事実が受容となる。韻文形式で評論を書くという着想は、その後立ち消えていく運命となるが、当時はまだ発展の可能性を有していたわけだ。

では、内容を見る。さわりでは《詩は唐詩と称へつつ 皇国(ミクニ)の歌と区別せり》《唐詩の外に手本なし/手本となるは唐詩ぞと》としたうえで[中川 1886:3]、《其罪深く支那学の 固陋(ころう)の教(おしえ)学ぶ徒の/思想を制し》と、旧態依然とした漢詩礼賛を批判する[同:5]。

次に、《左様(そう)して見れば詩たりとて 時に随ひ世につれて/遷(うつ)り変りて其時の 言葉を以て綴るこそ/誰にも解る其上に 自然巧(たくみ)に至るらん》と、当時における現代語の使用を勧める[同:5]。この《其時の 言葉》という部分は、『新体詩抄』の井上哲次郎による「序」にある《且夫泰西之詩。随世而変。故今之詩。今之語》という言を受ける[外山 1882:2-3](各論4-1参照)。

そして、《英国(エギリス)人の「ミルトン(John Milton, 1608-74)」や 日耳曼(げるまん)国の「シュルレル(シラー Friedrich von Schiller, 1759-1805)」の/詩に巧(たくみ)ぞと人云ふも 唯言の葉の用ゐ方/最と面白く綴るのみ》と西洋詩人を賞賛したうえで、《去れば皇国(みくに)の人々も/其心地して常不断 用ふる言葉其れなりで/志を写し詩に出せば 陳腐漢(ちんぶんかん)の寝言とは/丸で変りて甦生(よみがえ)り今まで死した我国の/詩も亦(また)世にぞ浮ばれん》と[中川 1886:5]、日常に即した言葉を使うことで日本の詩歌も向上すると訴える。さらに、《皇国(みくに)の言の葉の数は/足らざる上に不十分 思想を演ぶる能(あた)はずと》と和歌の短さと非思想性を嘆くのも[同:6]、『新体詩抄』の方針継承である。

それから、《止むべきものは漢詩なり/勉めよ励め我詩をば 学ばんものは是を聞き/今我々の唱ふなる 新体詩てふ名を冠り》と[同:6]、漢詩を排しつつ新体詩を推して、《殊に外山の先生の/抜刀隊の歌と云ふ 其詩は早く我国の/軍歌となりし事共は 同氏の名誉のみならず/又其の道の面目ぞ》とし、手本として「抜刀隊」を提示する[同:6-8]。ここでも新

体詩の代表格としての「抜刀隊」の存在が確認できる(各論 4-6 参照)。

ここまでは前置きで、本題はここからである。《我詩の体の創造を/考へ見れば西洋の「ポエトリー」より出しなん/左様して見れば我々は 詩を学ぶべき其為に/「ポエトリー」とは如何様か 究むるをも益ならん》と、新体詩は“poery”に学ぶべきだとし、《我詩の為に参考と/なるべきものを抜き出し 話さん事ぞ勝るんらん》と[同:10]、以後は西洋詩の紹介に頁を費やすが、そこは割愛する。最後は、《不便(ミズカラ)のとこや其外と 十分改良なし賜へて/我皇国(みくに)の「ポエトリー」 輝く事を務めてよ》と締めくくる[同:18]。

2.1.2「新体詩格・愛国美談」

著者は山口常太郎、編者は新体詩学研究会本部である。ほとんどの作品が無記名だが、『明治文学書目』に《書名に因める自作の詩と他の詩を集めしもの》とあるとおり[村上 1976:19]、山口作と見て間違いない。

「序」自体が 2 段組 13 行、七五調の論説詩である。さらに、本篇および詞書、すべて七五調の新体詩となっている。「序」に《皇国の為に文学の 改良せんと愛国の/世に著名なる人をかり 思の丈を伏し紫の/燃る計りに書にける》とあるように[中川 1886:19]、全篇に忠君愛国の主題が貫かれる。

なお、この書について野呂は、《『(新体詩学)必携』の主張・方針を実践している》ため、《かけ詞・縁語などもあまり使用されていない》とし、《全体的に見て作品にしろ詞書きにしろ、いずれも特に難解な言葉づかいがなく、わかりやすい》と、肯定的に評価する[野呂 1996:21]。以下、3 つにわけて考察する。

2.1.2.1 忠君愛国詩

まず、《進めよ勧め同胞よ 旭輝く日本は》で始まる無題の 3 段組 1 連 8 行の詞書が置かれる[中川 1886:23]。そして、「玉の緒の歌」「ロング フェロー氏人生の歌」が『新体詩抄』から(各論 4-2 参照)、「扶桑歌」が喇叭吹奏歌から(各論 4-6 参照)、それぞれ転載される。

次に、2 段組 4 連 12 行(1 連 3 行)の「皇統の歌」である。第 4 連を引く。《自由の民の真心は 国の御為(ミタメ)に捧ぐべし/皇国(ミクニ)を守る干城は 吾等の外におらぬべし/吾等の守る大皇国行末等し天と地に》[中川 1886:23-4]。野呂はこの詩における《「自由」はすでに自由民権運動のものとは異なっており、国運と矛盾せずかえって並行関係》にあり《国権的である》とする[野呂 1996:19]。当時、流行の「自由」が相反するはずの忠君愛国とも結びつき得るような概念でしかなかったことが垣間見られる。

それから、《国を愛する其人は 到底忠臣孝子なり》と始まる 3 段組 1 連 3 行の詞書「愛国の名誉」に続いて[中川 1886:28]、以下の故事を詠んだ詩が並べられる。

2.1.2.2 日本の故事

楠木正成・正行(まさつら)譚は『新体詩歌』以来、最も好まれる題材のひとつである。まず、正成に関する詞書として、3段組1連28行の「大楠公」が置かれる。《金剛山は今にあり 湊(ミナト)河原(現神戸市湊川)は今にあり 正成公は今ぞなし》で始まり、《湊の川は清くとも など菊水(楠木家の家紋)に及ぶべき など菊水に及ぶべき》と結び、正成の武功を説く[中川1886:28-30]。

本篇としては、まず《本朝軍歌》として「詠史」が『新体詩歌・第6集』から転載される(各論4-3参照)。続けて2段組5連15行(1連3行)の「詠大楠公」が掲載される。その第2連は《木の南(ミンナミ)は楠と 奇しき御夢の教にて/招(マネ)ぐ忠義に凝りし人 此後賊の肝寒(ヒエ)て/天謀時に乗じたる 勲(イサホ)の程ぞ見えにける》となっている[中川1886:30-1]。

次に、息子・正行についての詞書として3段組1連31行の「小楠公」が置かれる。《花は桜木さくらゐ(桜井、現大阪府三島郡)の 薫(カ)ほる教(ヲシエ)を守りつつ 共に死せんと思ひしに/心を後に河内なる ふる里さして帰来る 人は纔(ワズカ)に十一の/頑是(ガンゼ)なき他の童(ワランベ)子と 異なる筈よ此(コノ)人の 父は皇国(ミクニ)の御為(オンタメ)に/身を粉になせし其人の 気質を稟(ウ)けし正行は》と始まり、《国の賊なり尊氏は これを亡ぼせ国のため/忠臣孝子の鑑(カガミ)なり これを報いよ父の為 千部の供養(千部会、経を千回読む法会)に勝るべし》という母の言葉を経て、《脆く消ゆる其魂(ソノタマ)は 後の世々まで語りつぎ/言ひつ(継)ぎ行かん丈夫(マスラヲ)が 国を枕に眠る名を 国をまくらに眠る名を》と忠義を称え終わる[同:31-2]。

また、2段組1連7行の本篇「詠小楠公の詩」では、「新体詩学必携」で紹介したソネット式の実践に挑む[野呂1996:20]。全篇を引く。《父がかたみの宝刀は 敵斬り尽す為なりと/賢き母がいさめ言 よくも悟りし幼子は/忠義の鬼や湊川 七度生きて国の基/堅く守ると叫びし人 乗り移れるか此人は/翻がへしたる菊水は 実(ゲ)にこそ国の宝なり/梓の弓の一張りは 実に赤心(マゴコロ)のしるしなり/虎はとどむる美なる皮 残るは人の名誉(ホマレ)なり》[中川1886:32-3]

そして、3段組1連25行の詞書「児島高徳(たかのり)」では、『太平記』に登場する、正成と同じ南朝の忠臣・児島高徳(通称・備後三郎)が、隠岐に流刑の後醍醐天皇を奪還せんとする場面、《身を潜めつつ堅唾(カタヅ)の(飲)み 我天皇(オホキミ)を奪わんと ま(待)つに甲斐なや》、桜の木に忠節を誓う詩を記す場面、《さし抜きし日本刀 桜の老木(オヒキ)かき削り/赤きこころを書下(カキオロ)す》などが詠われる [同:33-4]。

2段組5連15行(1連3行)の本篇「詠児島三郎の詩」は、第1連《身にふりかかる春雨は 晴れても胸ははれやらぬ/心ありげな桜木は 花も涙をおさめかぬ/思案に砕く身も骨も君を思わば死ぬるとも》、第4連《鴉(カラス)は起こす明めくら 阿房(あほう)が読めぬ一連は/隠岐の海辺の朝桜 最(イ)と笑ましげに大君は/見そなはしなん筆の跡 残しりし文字は皆誠》というように脚韻詩となっている[同:34-5]。

2.1.2.3 海外の故事

1つ目は中国の戦国時代、趙の恵文王に仕えた藺相如である。3段組1連42行の詞書「藺相如」は「完璧」にまつわる故事を詠む。『史記・藺相如伝』には、趙の使者・藺相如は15の城と交換するために璧を持って秦に赴くが、秦の昭王は約束の城を与えず、身命を賭し璧を取り返すとある。《璧を与へて城なくば 其曲(不正)たるや秦に在り》《璧を渡せば秦王は/国の強きを鼻に掛け 贈る気ぞなし十五城 愛国深き藺相如/などて黙して止べきか》[中川 1886:35-6]。

2段組5連15行(1連3行)の本篇「詠藺相如の詩」は、第1連《広き楚国に宝なし 宝は賢き人ぞかし/朽ちぬ金言後の世に 教えの種子ぞ蒔にけり/学びの花ぞ咲にけり》、第2連《趙氏の璧は連城の 価ありとも何のその/疵なき璧に疵ありと 言ひし言葉ぞ薫ばし/言ひし気象ぞ最と高し》という脚韻詩となっている[同:36-7]。

2つ目は前漢の名臣・蘇武(前140？―前60)である。3段組1連32行の詞書「蘇武」は、その武勲を《漢の光武の天漢の 初の年に命を受け/中郎将たる彼蘇武は な(慣)れし故国を跡に見て 関路遥に勇々敷も/匈奴の国に使せり》と説く[同:37-8]。

2段組1連7行の本篇「詠蘇武の詩」は再びソネット形式をとる。野呂は《形式が先にあり、無理に作品の形態を整え完成させ》たため《惨憺たる出来と言わざるをえない》と評している[野呂 1996:22] 。全篇を引く。

《受くるも重き詔 捧げて出る丈夫は/のぼる山路や渡る川 匈奴の境千万里/越えて伸せし其権利 縮むる望み水の泡/蘇武が飼ふてふ雄羊は 子や生にけん神の雁/今ふる里に着る錦 19年着し襤褸/海士が板屋に降りし雪 心を砕く玉あられ/かしま敷名もかんばしき人相同じ彼と吾》 [中川 1886:38-9]。

3つ目は、古代ギリシアのテーベ(テバイ)の覇権確立に尽力した将軍・政治家で親友同士であるペロピダス (Pelopidas 前410頃-前364) とエパミノンダス(Epaminondas？-前362)である。本間は『経国美談』から取材したものであろうと推測する[本間 1937:68]。

3段組1連62行の詞書「「ペロピダス」及び「エパミノンダス」」は、二人の武功を説き、《読む人々よ心せよ/19世紀の西洋は 口に文明唱ふれど 呑噬(飲んでかむこと=征服)主義は平常ぞ/我天皇国に生れたる 人の枕は日本なり 人の枕は日本なり》と終わる警世の論説詩となっている[同:39-41]。

本篇「「ペロピダス」を詠ずるの詩」と「「エパミノンダス」を詠ずるの詩」は共に2段組1連7行のソネット形式をとる。以下前者の全文を引き、後者は略す。

《肉の林に酒の池 歌つ舞ひつ酣の/中に華美なる手弱女の まばゆき衣をとりかけ/待つ間程なく夜も更け 有頂天なる生酔の/腰や抜けん丈夫の 十二の体幹高き丈/「カドミ―」城の夜半の月 さえわたりける「ゼーブ」人/見よ「スパルタ」の弱き敵 こけつ顛(転び)つ遁(逃げ)ぬらん/残りし跡は最と憎き 人の血潮や花と見ん》[同:41-2]

2.1.2.4 その他

この書の冒頭を、3段組1連33行の「発端」という論説詩で飾る。《万(ヨロズ)の物の霊なりと自(ミズカラ)誇る人類の 生まれし元は分らざる》としたうえで、《地球上/現に住する其数は 14億とぞ知られける》として、人種別の特色を説明する[中川 1886:21-2]。野呂は、この詩には《後進民族への同情と、そうなってはならないという焦燥》が表明されていると指摘する[野呂 1996:19]。

続く2段組5連15行(1連3行)、中川訳(原詩不詳)の「洪水の歌」は、旧約を題材とする。第1連を《悪人共は殺されん 地球も共に滅すべし/西も東も人住まん 陸地目掛けて迫り来し/其(ソノ)洪水は畏しき 神の怒の是(コ)れ軍旗》と始め、第5連で《神の箱舟(アーク)は事無ふて 波間に浮ぶ其上に/弓を張りたる紅霓(コウゲイ)(虹)は 是は知る安き目標(シルシ)とは》と締めくくる[同:22-3]。

それから、無題の3段組1連5行の詞書《進めや勧め文学に 武芸に勇気奮はして/磨けよみがけ日本魂(ヤマトタマ)》が置かれ[同:24]、以下、これまで見てきた愛国詩が並べられる。

また、3段組10連30行(1連3行)の「苦学の歌」は、第8連《牛の歩行(アユミ)の遅くとも 千里二千里三千里/怠りなくば捗取(ハカド)らん 自暴自棄する其人は/天に対して不敬なり》というように、人生が努力次第である旨を説く教訓詩である[同:27-8]。

最後は米国の独立を主題とする。まず、3段組1連49行の詞書「米国独立の原因」は、米国建国の経緯を説明しつつ、後半で《肝に銘じて読む人よ 倩(ツラツラ)思ひ今日の 我日本は北海の/一葦(イ)海水程近く 鷲の旗影魯西亜の鰐/イザ事あれと睨み詰め/我(ワガ)日本の生血(イキチ)をば 吸(スス)り度(タ)き顔見ゆるなり 人気(ジンキ)眠れる支那の豚/折々寝惚(ネボケ)無礼なす》と海外情勢を憂い、最後を《米国人の殷鑑(インカン)(いましめ)に 心の化粧怠るな/朝日に匂ふ山桜 匂はする人吾等(ワレラ)なり 匂はする人吾等なり》とする論説詩である[同:42-4]。

2段組3連9行詩(1連3行)の本篇「米国独立を詠ずる詩」は、第1連《噫(アア)英王を打崩せ 神よ吾(ワガ)神々の風/噫民政を復してよ 友よ吾友友人よ/噫吾体何のため 噫吾心何のため》という脚韻詩である[同:44]。

2.2『学歌』

編者の山口常太郎(?-1902)は、国文学者・中国文学者の山口剛(1884-1932)の父で、編著書に『茨城県地誌字引』(1881)などがある。

2段組の全13篇は全て七五調で書かれる。『新体詩抄』より「勧学(の歌)」、『小学唱歌集・初編』(1881)より「蛍の光」(原題「蛍」)が転載される(各論4-1参照)。

まず、4連24行(1連6行)の「競漕」は大学予備門教諭の中川重麗作(美学者・俳人 1850-1917)。ボートレースを素材としつつ、各連の結びを《学びの淵に向ふ身は 浪あら(荒)くとも何のその/心ひとつに忍耐の 艪をおし切て進むべし》とする奨学歌である[内田 1886:4-5]。

次に、朝倉達男による連作新体詩が「旗奪」「綱引」「競争」「打毬」と4篇置かれて

いる。朝倉についての詳細は不明、自由民権運動に際し、茨城県下(現岩井市)に設立された政治結社・喈鳴社のメンバーとしてその名がある[常総市]。

1連7行の「旗奪」は《群がる敵をうち破り 我こそ奪はん旗印》と始まり《鬨(トキ)声揚ぐる夫(それ)まて(で)は 勇気を鼓して競ふべし》とくくる。1連6行の「綱引」は《足もと強く踏みしめて 山も崩るる斗(バカ)りなり/えいやえいやの掛声は 桜の花も散るばかり》とし、「旗奪」と同じ句でしめくくる[内田 1886:5-6]。1連7行の「競争」も《薫りをおくる春風に 吹流れたる旗とはた》と始まり、また同じ句で終わる [同]。1連7行の「打毬」も《入り乱れたる旗標(ハタジルシ) 赤と白とはてき(敵)味方》と始まり、やはり同じ句でくくる。

それから、首藤による1連24行の「新案いろは」は、《今(いま)は昔と異なりて 禄(ろく)も位も知恵次第/恥(は)ぢも誉れも学問を 日夜に励み怠るの》と、「いろは」で詠む教訓歌である[同:6-7]。

続く作者不詳の1連18行「秋夜の雨」では、《世のよ(良)しあ(悪)しや古郷(フルサト)の 老ひたる母の身の安否/忘るる間(ヒマ)はなけれども 儘(まま)ならぬ身を如何せん》《落(オツ)る木の葉に身を悟り雨をは(ば)母の涙ぞと、《末の花咲く春を待つ》という秋雨によせて傷心を詠む風物詩である[同:7-8]。

16連48行(1連3行)の中川清次郎「早春児童を誡む」は教訓梅で、枝にからんだ凧の糸を取ろうとする子供に《梅か(が)枝は 汝が為めの良き友ぞ》と梅花を散らさぬように訴えかけ、《楽む後は耐えしのび 美なる学科の花咲せ/香をりを梅と争へよ》としめくくる[同:8-10]。

それから、1連34行の蜻蛉子「睡気を醒ませ」は、脱亜入欧の意気を鼓舞する論説詩である。《我が日の本の学問は 支那の盛の其頃に/彼より得たる形の儘(まま) 創めて立つる説もなく/孔孟主義の仁義説 長く心に浸染し》と始められ、その中国も《人の耳目を新にし 智識の増の少なきは》という状態であるとされる。一方、ソクラテス、プラトン、カント、ヘーゲル、ニュートン、ガリレオなどは、《各々自ら説を立て 或は機械を発明し》たのであり、《今や是等(これら)の人々の 生れ出たる欧州は/世界の中の開化国》となっているとし、日本も《早く発明創造の/智力を附て欧州の 開化の人の仲(なか)ケ間入(まいり)/せねば成らざる時なるぞ》、それゆえ《睡気醒(ねむけさま)せよ生書生/酔ひ潰れたる漢癖者》としめくくられる[内田 1886:10-1]。

また、編者・山口による4連8行(1連2行)の「小喩」は教訓詩である。《雨の小粒の小さきも 此大なる海となる》、《少しの途(ミチ)も曲りなば 果ては不良の谷ならん》[同:11] 。

最後に、塚越由松の1連52行「破夢」という愛国詩である。《明日を定めぬ仇し身を/不死と頼むは愚かなれ 計り知られぬ夢の世を/無事と頼むは迷いなれ》《我々とても三千と 七百万のそのうちの/人にしあれば日の本の 国の責任万分の/一部を担(ニナ)ふ身ならずや》《不能の二字は世の中の/男子社会(ナカマ)に無き文字ぞ》、《志途一徹に突進し/遂げずば死せよ志 死せずば遂げよ志/広き世界のその中に 為して成らざることぞなき》 [内田 1886:11-3]。

3. 『書生唱歌』

7月、東京で刊行、編者は岸田吉之輔である。各論 4-6 で扱った軍歌的な作品以外の 4 篇を見る。全篇七五調1段組みとなっている。

4篇のうち3篇が大和田健樹(1857-1910)によるもので(各論 3-2 参照)、1つ目は7連 89 行の「バイロン氏青海原」で、バイロン(George Gordon , 1788-1824) の『チャイルド・ハロルドの巡礼(*Childe Harold's Pilgrimage*, 1812-1818)』の訳詩である。原詩の第4編 182 を訳した第 5 連を引く[岸田 1886:12-17]。大和田のぶりを見るために原詩を付す[Byron: CLXXXII]。

《浜辺にた(建)てる帝国は(Thy shores are empires,)/汝(ナレ)をのこ(残)して変わりゆく。(changed in all save thee—/)/ローマ、ギリシア、アツシリヤ、(Assyria, Greece, Rome,)/いま(今)はいかなる世のさま(様)ぞ。(Carthage, what are they?/)/自由に富みし往昔も、(Thy waters washed them power while they were free/)/無道の君のいで(出)し日も(And many a tyrant since:)、/岸は奴隷となりたるに(their shores obey/ The stranger, slave, or savage; their decay/ Has dried up realms to deserts:) /汝のみひとり染みもせず。(not so thou,)》。

2つ目の4連 32 行(1連8行)の「夕暮れ」は風物詩である。冒頭を引く。《遠山寺のかね(鐘)の声/林をこむる夕けむり(煙)/日影のこ(残)さずなりにけり。/ひび(響)く方より暮れそ(染)めて、/ねぐらにかへ(帰)るむら(群)がらす(烏)/ゆくへ(行方)み(見)るままかきき(消)えて、/ /うら声すごくふくろふの/鳴くやうし(後)ろの岡つづ(続)き。》[同:17-19]。

3つ目は「少女(ヲトメ)四時の歌」も風物詩で、東晋の詩人・陶淵明(365-427)の「四時歌」に倣い、春夏秋冬それぞれ9行の4部構成とする。四季のうち「冬」を引く。《ふ(降)れふ(降)れ小雪、ふ(降)れ小ゆき(雪)。/む(向)かふの松もかく(隠)る迄。/かきね(垣根)の竹もこ(越)さむまで。/ひろ(拾)へや子ども玉ひろ(拾)へ。/かざ(飾)れのや子ども花かざせ。/あらおもしろの雪げしき(景色)、/ぎん(銀)の世界になりにけり。/なほふ(降)れ小雪よる(夜)までも。/あす(明日)までも。》[同:19-21]。

残る1篇は桜陰散人の「独乙(どいつ)書生酒の歌」で、酒を主題とした一種の戯れ歌である。1番 28 行、2番 22 行、3番 14 行、3番から引く。《同じ一升の酒の中、/甘露もあれば毒もあり。/同じ一つの猪口(チョク)からも/美人も出れば鬼も出る。》《酒はからだ(体)にふ(降)る雨か、/悪しき土地には泥をま(増)し、/善き畑には肥(コエ)となる》[同:23-27]。

4. 『新体詞選』

8月、東京で刊行、編者は美妙・山田武太郎である。肉筆回覧誌版の『我楽多文庫』に載せた硯友社の同人の詩歌 10 篇を掲載する(各論 4-5 参照)。同年刊行の『少年姿』同様、山田は漢詩を意味する「詩」を避け「新体詞」という呼称を用いる(各論 4-5 参照)。全 10 篇、

七五調2段組である。

本間は《『新体詩抄』の直訳張りに、意識的に反抗したと覚しく》《掛詞縁語などを多く用ゐて、美辞麗句式な表現をしたところにやや見るに足るものがあるにとどまつて》おり、《取立てていふべきものはない》と評する[本間 1937:102]。山宮も《年少の才子のそこはかとなき筆のすさび》で、《とり立てて云ふべき程の作がない》とする[山宮 1950:457]。

以下、作者別に見る。

4.1 尾崎紅葉

尾崎の作品は1連11行の「書生歌」のみで、立身出世のための勉学を鼓舞する内容である。《親しき人と手を分ち、頼みし親の膝を去り、/立てては堅き志》《身を立て名をば揚雲雀、鶏の群なる鶴となり、/千歳にかかる功績を、立てん心を忘れじな。/勉めよ君よ励め君。》《諸葛(孔明)もむかし書生なり。》[山田 1886:6]。

4.2 丸岡九華

九華・丸岡久之助は最多の5篇を載せる。

まず、6連30行(1連5行)の「士卒の夢」では、老兵の望郷の念を詠む。スコットランド出身の詩人、トマス=キャンベル(Thomas Campbell 1777-1844)の“The Soldier’s Dream”の翻案である[矢野 1972:375]。第5連を引く。《家に帰りて、父母に、 さす盃は浅くとも、/思はさしも深緑、 待つと聞けばいとど猶、/妻子の面もなつかしく、 互に昔語合ひ、/遂には濡らす袖袂。 そも理といふばかり、/慰めかねて労兵の、 悩む姿ぞ哀なる。》《妻と我が子の声聞けば、/流石に猛き老兵も、 床に転ぶと見し夢の/に聞ゆる喇叭の音、 起きてぞ修羅に急ぐらん。》[山田 1886:7-9]。

次に、1連25行の「仏国革命歌」である。《国の光も自由のみ。 民の誉も自由のみ。/天の我等を作りしに。 人の上なる人もなく、/人の下なる人もなし。》《飽きても逐へる暴君の/下に立つなる身のつらさ。 恨はつもる彼悪魔。/いつまで斬でおくべきぞ。 自由は民の剣なり。/神は自由の血を好む。》《死ねや死ねや国のため。 斬れや斬れやかの悪魔。》[同:10-2]。

そして、5連45行(1連9行)の「路易帝断頭台」では、ルイ16世の処刑を詠む。結びを引く。《目を閉ぢさして、今霎時、 合図をそれと待ひま(暇)も/新身の刃晃きて、 御魂は雲に入相の/鐘も無常の御首を、 手に振廻し、暴民は、/＝共和自由万歳。＝と どよめきたつる其響。/御運の程と仏蘭西の 国の様こそあはれなれ。》[同:17-20]。

それから、7連28行(1連4行)の「古戦場」はいくさの無常を詠む。第4連を見る。《見る目怪しき谷蔭に 頽果てたる古塚の/傍に残る槍剣。 奥は幽けき洞の中。/猶今ながら矢叫の 音さへ聞ゆばかりなる。/そも此処にこそ壮士が、 其亡骸を埋めけん。》[同:20-2]。

最後に、10連120行(1連12行)の「リツプ、バン、ウンクル」は短編小説「リップ・バン・ウィンクル Rip van Winkle」を素材とした詩である。米国版浦島太郎ともいえるこの短編は、米国の小説家・ワシントン=アービング(Washington Irving, 1783―1859)の短編集『スケッチブック *Sketch Book*』(1820)に収められる。矢野峰人は《その出来栄も、必ずしも成功とは言ひ難いが、斯く外国の短編小説を我が「新体詩」に書き改める事は、全く新しく且つ大胆な企てとしてその意気込に対し、敬意を払つてよからう》と評する[矢野:375]。後半より引く。

第6連《睡魔(ネムリ)さませしウンクルは、只呆然(タダボウゼン)となが(眺)むるに》《持て来し銃(ツツ)も錆朽(サビク)ちぬ。衣(キ)たる衣も敝果(ヤレ)てぬ》、第7連《さびたる村と思ひきや、/今日は賑う一都会、行(イキ)かふ人の数多く、/軒をつら(連)ねて立ち並ぶ》《我家をみれば柱朽ち、/壁は頽(クズ)れて妻も子も、影だに見えで蘿蔦(ツタカヅラ)》《涙に咽(ムセ)ぶウンクルは、妻よ子供と叫べども、/答ふるものは庭面(ニハオモ)に、降掛(フリカカ)りつつ鳴る葉のみ。》《つらつら我身みす(見据)へれば、いつか頭に霜はつ(積)み、/髯は胸まで延(ノビ)居たり。》、第10連《暫(シバシ)と留(ト)むる人見れば、年まだ若き女(オナゴ)なり。》《＝(…)おんみ(御身)の父はこのリツプ＝。＝何こは父か。こは父か。＝》[山田 1886:27-35]。

4.3 山田美妙

山田は4篇を寄せる。各論4-6で扱った「戦景大和魂」以外の3篇を見る。なお、山宮はこの「戦景大和魂」のみを佳作とする[山宮 1950:457]。

まず、1連20行の「明治15年の4月隅田川原に花を観て」では、花見の叙情から立身を詠う。《霞(カスミ)も七重八重ざくら。 空さへ匂ふ花曇。/見亘(ワタ)す方は雲かそも。 ながめ吉野の山桜。》《露の命と知るからは、 勉励みて後の世に/名を残さずば、 生来(ウマレキ)し 其甲斐とてもあらなみ(荒波)の/海にもやがて、よど(淀)まずば、 此川水(コノカハミヅ)も出でつべし。》[山田 1886:9-10]。

次に、1連16行の「行燈(アンドウ)」では文明開化を賛美する。結びを引く。《洋燈(ランプ)瓦斯(ガス)燈乃至(ナイシ)また、/電気燈ともかは(変)らずば、 文明世界の骨髄を、/得べき術(スベ)とてあらずかし。 旭の陰に一入(ヒトシホ)の/光添ふべき由(ヨシ)もなし。 国の光を遠近(オチコチ)に、/赫(カガヤ)かすべき法(スベ)もなし。 やよや行燈早廃(スタ)れ。/やよ廃れかし。廃れかし》[同:12-3]。

そして、「敵討名浅広記」を粉本とする6連72行(1連12行)の「大川友右衛門」である[亀井 1984:6-7]。細川家に奉公する大川友右衛門が火事に際し、徳川家から拝領した御朱印を割いた腹に入れて守り抜き、息絶える場面を描く。なお、山田は『少年姿』収録の「大川数馬」において、大川友右衛門の衆道譚を詠う(各論4-5参照)

《対向(ムカヒ)を見れば、こはいかに、はや御朱印の宝蔵(ホウザウ)に、/火も移りたる体裁(テイタラク)。》、《早御朱印は恙無(ツツガナ)く、出だしたれども、 愁(ナマジヒ)に、/此身を免れなんとせば千刃一簀(センジンイツキ)の悔あらん。》、《挿添をもてあらがねの/土を穿ちつ、返す手に、我と我腹つんざけば、/颯(サツ)とばかりに迸(ホトバシ)る 血汐は赤き心根や》、《かの御朱印を疵口に、用捨(ヨウシヤ)もあらず捻込(ネジコ)みつ、》《莞爾(ニツコリ)と/笑

むを此世の名残にて、あへなく息は絶えにけり》[山田 1886:22-7]。

5.『纂評・新体詩選』

1886(明治19)年9月、東京で竹内信隆編『纂評・新体詩選』が発行される。明記したもの以外は作者不詳、七五調2段組で構成される。

「凡例」に《我邦古来ノ長歌ト全ク其趣ヲ異ニシ新タニ壇宇ヲ開クモノ是レ新体ノ名ノ因テ起ル所以ナリ》とあるように[竹内 1886:5]、『新体詩歌』全5集で多くの長歌を採用した竹内は今回は長歌と決別し、漢詩への接近を図る。書名にも「詩歌」を廃し「詩」を採用し、「序」および全評語、そしてほとんどの作品タイトルに漢文を用いる。さらに、22篇中5篇の漢詩を採る。このような漢文脈の編集は、読者獲得のためのみならず、当時の新体詩が漢詩を模範としていたことも要因である(各論4-3参照)。

収録されている漢詩は楠木正成の湊川の戦いに材をとった「拝湊川楠公廟」、「桶峡懐古」の2篇、白虎隊を詠んだ「観会津白虎隊自刃之図有感」、そして外山の「抜刀隊」に学んだ「訳抜刀隊歌」、粟原亮一作「訳波蘭(ぽーらんど)滅亡之歌」の5篇である。本稿で対象とするのは日本語による新体詩であるため詳細は割愛する。

5.1 論説詩

2篇掲載。まず、先に触れた『学歌』収録の「睡気を醒ませ」が「醒睡気」として転載される。

もうひとつは、外山による1連130行の長詩「耶蘇弁惑一節」である。初出は『東洋学芸雑誌』第23号(1883.8)[宮崎 2007:58]、《亜米利加の土人(ネイティブ・アメリカン)》のイロコイ族首長、《レツト、ジヤケト(レッド=ジャケット)》が《宣教師クラムブ(クラム)》に対して行った演説を訳詩化したものである[竹内 1886:41-6]。ネイティブ・アメリカンを主題に採るのは新体詩では初めてのことであるため､大意がわかるよう長くに引く。

《狩場の事で争論の 起ることどもありとても/血を見て事は収まりき》、これまでいさかいはすぐに収まるものだったが、《主等の祖先大洋を/渉りて此地に来りけり》、そんなところにあなた方の祖先がやってきた。《そも本国を去りたるは/国に悪人多き故 はるばる此処に来れるは/己等が守る宗門を 信仰なさん為なりと》、信仰を守るためにここまで来たと言うので、《我等は彼に与ふるに コーンと肉を以てせり》、我々はとうもろこしと肉をもって饗した。《彼等は之に酬ゆるに 却て毒を以てせり》、それなのに彼らは毒をもって応えた。

《白人ここに新国を 見出したれば其由を/国に帰りてつ(告)げしかば ますます来る者あるも》、新しい国を発見したと知った白人たちの仲間がどんどん増えたため、《我等は彼を友人と》《広き土地をば与へたり》、我々は友人として広い土地を与えた。けれども《我が全国を望みたり》、ついにすべての土地を欲するようになった。《我が目もここに

醒めたれば》、ここに至り目も覚め、《遂に戦争と相成》ったのだ。

また、《既に主等は我が国を/奪ふといへどもかくてなほ あきたらずして無理おしに/我が宗旨をば変へんとす》、あなたがたは国を奪った上に改宗を迫る。《はるばる此処に来りしは/大神の意に叶ふ様 これを仰げん其仕方/人に知らする為なりと》、神を敬う方法を伝えるためここにやってきたのであり、信じなければ《余等は天に昇られず》と脅す。けれどもそれが本当なら《我が祖先には知らせぬぞ》、なぜその信仰はあなたがたにのみ伝えられたのか。《大神仰ぐ其道は 1つに帰すと云うはるれど》、それに神に通じる道は1つと言うが《なぜ白人の内とても 宗派にかかる異同ある》、なぜ諸宗派に分かれているのか。それに《余等の宗旨も天父より/余等の祖先に賜りて 遂に余輩に伝えれり》、我らの宗教もキリスト教同様祖先より伝えられたものだ。

《我が兄弟よ人類は/みな諸共に大神の つく(創)りなしたるものなれど》、確かに人類は神によって作られたが、《其白人と赤人と 全く別に造られて/面の色より風俗も 一つも違はぬものはなし》、白人と我々は全く別に創造されたため、肌の色のみならず、風俗も全く異なる。《我が兄弟よ自分等は 主の宗旨を亡ぼさん/ことも願はず主達の 之を棄つるも願はねど/余輩は人の宗旨より 自分の宗旨信じたし》、我々は自身の信仰を守りたいだけなのだ。

《右は則ち我答 云ふべいことは別になし》、答えは以上である。《主等の帰路を大神は/まも(守)り給ひて安全に 主等の友に会はしめん/ことを余輩は冀望(願い望む)なり》、どうかご無事にお帰りいただきたい。《此言聞きて宣教師/会釈もなしに席を立ち》、こう言うと宣教師は挨拶もせず席を立ち、《手を握ることさへも/辞める故に赤人は 皆うち笑みて立ち去れり》、握手もなかったので、ネイティブ・アメリカン達も笑って立ち去った。

5.2 戦争詩

まず、同年刊行の河井版『軍歌』収録の「復古の歌」が「王政復古歌」として掲載される(各論 4-6 参照)。

次に、4連 18 行「莱因河戍兵(国境を守る兵)歌 」だが、これは「ラインの守り Die Wacht am Rhein」の翻訳詩である。『書生唱歌』掲載の「ラインの守〈独乙書生の歌〉」とは別である(各論 4-6 参照)。「抜刀隊」制作に際して「ラインの守り」と「ラ・マルセイエーズ La Marseillaise」を参考にしたと外山が語るように(各論 4-2 参照)、両者は軍歌の手本的存在である。

それから、1連 27 行の「薩摩琵琶歌」は西南戦争を題材とする。戦国期、武士の闘争心をそそる目的で薩摩に生まれた薩摩琵琶は、明治維新以降、東京中心に広まる。詞書には、勝海舟(1823-99)が薩摩琵琶で有名な西幸吉(1855-1931)に送った歌とある。原題「城山」のこの歌は、西郷隆盛(1827-77)の死を悼み、勝が作詞し作曲を西に依頼したもので、1886(明治 19)年に歌人の高崎正風(1836-1912)邸で初演される(電子版『ブリタニカ国際大

百科事典・小項目事典』)。なお、西は西南戦争で西郷に随伴し、陣中で琵琶を奏している(電子版『日本人名大辞典』講談社)。内容は下記。

《それ達人は大観す 抜山蓋世(山を抜き取る力、世をおおいつくす気力)の勇あるも/栄枯は夢か幻か》《何を怒るやいかり猪の 俄かに激する数千騎/勇むに勇むはやり雄の 騎虎の勢い一徹に/留り難きぞ是非もなき》《明治10年の秋の末/諸手の軍打破れ 討つ打たれつ頓て散る》、《薩摩武雄のをたけびに 打散る玉は板や打つ》[竹内 1886:22-3]。

最後に、『太平記』に材を取った1連52行の「記正行母教訓詞」がある。桜井の離別の後、憤死した父・楠木正成の後を追い自刃せんとする正行を、その母が夫・正成の遺志を説きつつ諌める場面を詠む。

正行は《刀を右の手に持ちて 自害せんとぞ構え》る。すると《母此様を見るよりも 驚き起て走り寄り》、《涙を流して》、《幼き身にもよくよくに/事の道理を思へ見よ》と言い、忠義のため《逆賊共を滅ぼ》すよう努めよと息子を説得する[同:19-21]。

5.3 教訓詩

まず、『学歌』収録の「競漕」を1連にまとめた「端舟競漕歌」である。詞書によると、1886(明治19)年に隅田川で行われた競漕会に際して詠まれたものだという[竹内 1886:15]。

それから、5連15行(1連3行)の「学の歌」がある。第1連で《学べや学べ皆学べ 人と生まれし上からは/学びの道を忘るるな》と始まり、勉学の重要性を詠う。第2連《只怠らず学びなば 国の宝となりぬべし》、第3連《我身一人の為ならす/国の利益を図るべし》と、国家のための学びという側面も協調される[同:16-7]。

5.4 風物・心情詩

一つ目は、3連44行、反歌付の詩歌「武蔵野歌」で、《日本武の御稜威(天子の威光)もて ことむけませし吾妻路の》と始まり、武蔵野の情景を詠みつつ、1連目は《あな物淋し武蔵野や/あな物悽し武蔵野や》、2連目は《あな人繁し武蔵野や/あな家多し武蔵野や》、3連目は《あな変りたり武蔵野や/あな遷りたり武蔵野や》といずれもリフレインして終わる[竹内 1886:12-4]。

もうひとつは1連17行の「初冬山居臥病」で、《衣引き被けて病の床》《嗚呼山中は物さぶ(寒)し/嗚呼病める身はいと苦し》と病床の身を嘆く内容である[同:40-1]。

5.5 色・恋詩

新体詩において色や恋という主題は、同年刊行の『少年姿』における男色ともに本書で初めて扱われるが、男女間の交情は新体詩上初となる。宮崎真素美は《「情」が「恋愛」という新たな衣をまとうのは、まだ少し先のことである》が、《同時期の新体詩集に例を見ない》《試み》として、《新体詩の形式のうちに男女の情愛をうたい込んでゆくことの

端緒を開いた詩集として意味を持つ》と高く評価する［宮崎 2007:38］。なお、宮崎は《俗謡風で調子よく流れてゆく》反面、《文体に対する新たな試みがなされていない》と評している［宮崎 2007:25］。以下、内容を見る。

1つ目は、1連35行の「不夜城の詞」で、《鉄造りの大門に 車とどろと輾らしつ/浮れて通ひくるわ(来る、廓)なる》と四季折々の遊郭の風情を詠みつつ、《今起き出る手弱女が/鬢の後れの黒髪を かきあげつつに客人の/背に打ちかかる重衣》、《只見あ(合)はせる顔と顔》と続けられる［竹内 1886:30-2］。

2つ目は、1連19行の「戯に娼婦に寄す」である。《黄金の為に身を沈む/川竹(遊里)の名ぞ悲しけれ》と娼婦の境遇を哀れみつつも、《真心を/替らで立る操花 いつか香れる千世の史/史に残する人や誰》と、静御前や江口の君など、歴史に名を刻んだ遊女を列挙し、《あだに此世を夢と見て/草木と共に朽るなよ 万世後の史までも/遺す名をこそ望めかし》と溺れず身を立てよとしめくくる［同:32-3］。

3つ目の1連35行「越路の白雪」では書生の心情を詠う。立身出世のため故郷・越後を出て京都に来たものの、《過越し方を思ひなば/身は渓水の流なり 清むも濁るも恋と云ふ/底の心の迷ひから 悲喜哀歓の地に迷ふ》奈良・春日野において色道に惑い、《奇縁の糸の一縷に/思ひ染たる恋人の 名も芳しき花の色》、《覚めても迷ひ迷ふては/又迷ひ入る恋の闇》恋に身をやつし、《咲き初むる/寒紅梅の色も香も 実もなる男児が志/立て京都に遊ぶ身の 年を他郷にふる(振る・古)郷へ/錦を飾る返り花 何時咲くことか白雪の/越後の空を望むのみ》、望郷の念にかられつつその身を嘆く［同:33-35］。

4つ目の1連20行「戯に美人に送る」は遊女への恋文の体である。《高嶺の上の桜花手折んことも中々に/只お姿を見る計り あわれと推し玉くしげ》あなたは手の届かぬ高嶺の花であるけれども、《解けて一夜のおなさ(情)けに やさ(優)しき言の葉賜はらば/我が百年の命とも を(惜)しくは比良に思はねと/思ふ暮の雪積り》私の思いは命がけであるのに、《恋路も今はた(絶)へ果てて》その命脈がつきようとする今、《色も香もなき筆とりて/拙なきふみ(文)の言の葉を/綴る心をお推文字/神かけ念じまいらする》こうして手紙をしたためる、という内容である［同:35-6］。

5つ目の1連30行「賽美人涙」は、その逆で遊女・玉寿からの恋文である。《去年の弥生の花盛り/ゆかり(縁)の君に逢ひ初めの 色こひ(濃い)こひ(恋)の厚衾/余所へ洩らさぬ睦言の つ(尽)くる期もなき暁に/別かれはいとど鴛鴦の 雛なれぬ中の恋衣》と二人の仲を綴り、会えなくなったことを嘆く［同:37-8)。

6つ目の1連12行の「待春詞」では、《今はいや(賤)しき務めして/憂(浮)き川竹の沈むとも 心の濁りあらざれば/いつしか晴るる秋の月》と、横浜・紅髯楼の遊女となった幼馴染への想いを綴る［同:39-40］。

注目すべきなのは7つ目の作者不詳、1連57行の「贈学友」である。故郷を出た男性を想う女性が書いた体で書かれているが、ここには「恋愛」の萌芽が見られる。

《五年六年其間/同し学ひの窓の家に 互に励み励まつ/問ひつ問はれつ相勉め》るばかりでなく、《出ては野山に徜徉し/居ては道義を相語らへ 水魚と契きる交わりも》あった男性が、《学ひの道を修めんと 妻諸共にうち捨てて/遠き旅路に出て立つ》と筆者は耳にする。彼女は《妾は此後誰に依り 学ひの道や裁縫と/誰に相聞へ相学ひ 其疑ひを晴さんや》と思い、《生きて居なんもあしけ(味気)なし》という様になり、自分も《おん身の後に従ふて/行かんとすれは如何んせん》とまで思いつめあきらめる。が、《一度別れし其後は/楽しき事の絶てなく 日々の食さへ甘からす/夜毎の夢も結ほれす 人の言さへものう(物憂)くて/日夜おん身の事のみを 心におもへ鬱々と/病も出なんありさまに 父母さへ痛く苦しみて》と言うような状態の陥る。けれども、《暫しの別れは悲しくも/又逢ふ事の由あらん》と思い直し、《よし妾身もこれよりは 日夜裁縫学問を》《切磋黽勉(励み勉める)琢磨して 他日師範の業を卒へ/目出度おん身の皈る日を 楽んてこそ待ち居ん》と考え、帰りを待つことにする。そして、以下のような忠君愛国、立身出世の句で締めくくる。

《民は国家の大本なり/その本立て国栄ふ》、《見よや欧米各国の 兵強く国富みて/世界の内に比ひなく 栄かふるも其源は/人智を開くの外そなき》、《さすれはお身か其職(師範)は/国の盛衰にかかるなり おん身は実に重職そ》《他日おん身か錦着て/帰る日を待ち侍るなり おん身夫れ是を黽めよや/おん身夫れ是を勉めよや》[同:47-9]。

６．総括

1886(明治19)年における新体詩の動向を総括する。

なにより注目すべきなのは軍歌が生み出されたことである。各論4-6で見たように、1882(明治15)年に刊行された『新体詩抄』により、新体詩における忠君愛国や戦争(いくさ)を中核的な主題とする流れが生みだされ、それを発展継承させる形でこの年、河井源蔵版『軍歌』が登場する。こうして生み出された軍歌は新体詩の枠にとどまらず、やがて別ジャンルとして独立し、繰り返される戦争を通して大日本帝国における最大の国民的娯楽へと成長する。

次に重要なのが新体詩の全国的な広がりである。『新体詩抄』により日本語で書かれた“poetry”たる新体詩が創案され、それを拡充した『新体詩歌』によって読者が獲得される。日本各地に新体詩の愛好者・作者が広がった成果として、大阪での『新体詩林』発行があり、茨城における新体詩学研究会の設立がある。以後、新体詩は全国の読者を作者として巻き込みつつ成長していく。

最後に特筆すべき点として、色・恋の登場がある。新体詩は誕生以来、色や恋といった主題を禁忌としてきた。それがこの年、各論4-5で考察した『少年姿』における男色(衆道)や、本稿で見た『新体詩選』における遊郭における色道など、色・恋を扱う新体詩が初めて現れる。確かに、両性の平等性や情愛の精神性を重んずる「恋愛」は、これら男色や廓遊びにおける色・恋とは一線を画する。それでも、新体詩に色・恋という主題が導入された恋愛

詩への一里塚となるで。とりわけ『纂評・新体詩選』の「贈学友」では限りなく恋愛詩に接近する。

以上 3 つの点から、1886 年は新体詩における画期と位置付けられる。

おわりに

日本が国民国家体制に組み込まれていく中で、多くの伝統が変容を余儀なくされる。とりわけそれまで中国文化に依存し、社会上層部に抱え込まれる形で存続してきた儒学の解体が著しい。結果日本における「文学」は、漢学から“Literature”へと再編され、国家語たる日本語を用いることが前提となっていく。それと並行する形で、「詩」としての漢詩も日本における“Literature”から排除され、やがて「詩」は新体詩を意味するようになっていく。

以上のように、現在私たちが当たり前のように享受している“poetry”概念は、漢詩の排除や軍歌の誕生、色・恋の忌避と受容など、明治 10 年代における様々な試行錯誤を経てきている。

以後、各論 4 シリーズでは引き続き明治 20 年代における新体詩の動きを追う予定である。

注　取扱各論一覧

論文呼称	論文名	掲載雑誌（発行年）
各論 3-2	1890 年代における国文学カノンの形成―国民国家論 5(※)― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1348&item_no=1&page_id=13&block_id=77	『鈴鹿国際大学紀要』第 14 号(2007)
各論 4-1	日本における「詩」の源流としての「唱歌」の成立―国民国家論 7― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1415&item_no=1&page_id=13&block_id=77	『鈴鹿国際大学紀要』第 16 号(2010)
各論 4-2	『新体詩抄』による「詩」の本流形成―国民国家論 12― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1507&item_no=1&page_id=13&block_id=77	『鈴鹿国際大学紀要』第 21 号(2015)

各論 4-3	『新体詩歌』による「詩」の流域拡大―国民国家論 13― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1888&item_no=1&page_id=13&block_id=77	『鈴鹿大学紀要』第 22 号(2016)
各論 4-4	『十二の石塚』による「長詩」の誕生―国民国家論 14― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2483&item_no=1&page_id=13&block_id=77	『鈴鹿大学紀要』第 23 号(2017)
各論 4-5	美妙・山田武太郎『少年姿』あるいは「男色」―国民国家論 15― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2739&item_no=1&page_id=13&block_id=77	『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要・人文科学・社会科学編』第 1 号(2018)
各論 4-6	1886 年における「軍歌」の誕生―国民国家論 16― https://suzuka.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2932&item_no=1&page_id=13&block_id=77	『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要・人文科学・社会科学編』第 2 号(2019)
各論 4-7	【本稿】新体詩の画期としての 1886 年―国民国家論 17―	本紀要

※論文の副題「明治期における「文学」の形成に関する国民国家論」は「国民国家論」と略記

参考文献

【紙媒体】

亀井秀雄(1984)「明治合巻と新体詩―状況設定の方法化について―」日本文学協会『日本文学』33 巻 7 号

野呂芳信(1996)「「新体詩学必携/新体詩格・愛国美談」について」明治詩探求の会『明治詩探求』第 3 号

藤田徳太郎(1939)『国文学の世界』人文書院

本間久雄(1937)『明治文学史・下巻』東京堂

宮崎真素美他(2007)『言葉の文明開化―継承と変容―』学術出版会

村上春吉(1976)『明治文学書目』飯塚書房

柳田泉(2005) 谷川恵一校訂『随筆 明治文学 1　政治篇・文学篇』平凡社(東洋文庫)

矢野峰人(1972)「創始期の新体詩」外山正一他『詩人集(一)・明治文学全集 60』筑摩書房

山宮允(1950)「解説・創成期概観―草創より明治 28 年迄―」山宮編『日本現代詩体系・第 1 巻』河出書房

【電子媒体】(最終閲覧日：2019 年 9 月 30 日)

(1) 国立国会図書館・デジタルコレクション

内田鶴吉他編(1886)『学歌』柳旦堂（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855080）

岸田吉之輔編(1886)『書生唱歌』酒井清造他(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/855402)

外山正一他編(1885)『新体詩抄・初編』丸屋善七
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876377)

竹内信隆(1886)『纂評・新体詩選』春陽堂（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876380）

中川清次郎(1886)『新体詩学必携/新体詩格・愛国美談』春陽堂
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876372)

百田宗治(1929)『鑑賞独歩詩選』金星堂(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1111550)

山田武太郎編(1886)『新体詞選』香雲書屋（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/876381）

矢野文雄訳編(1884)『経国美談・斉部名士・前』報知新聞社
(http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/896820)

(2)国文学研究資料館・近代書誌・近代画像データベース(URL 前の数字は画像番号)

小川平吉編(1885a)『新体詩林・第 1 号』新体詩林社
3 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00038/WASDT-00038-03.jpg)
4 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00038/WASDT-00038-04.jpg)
6 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00038/WASDT-00038-06.jpg)

小川平吉(1885b)『新体詩林・第 2 号』新体詩林社
2 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00039/WASDT-00039-02.jpg)

小川平吉(1885c)『新体詩林・第 3 号』新体詩林社
2 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00040/WASDT-00040-02.jpg)
3 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00040/WASDT-00040-03.jpg)

小川平吉(1886)『新体詩林・第 4 号』新体詩林社
2 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00041/WASDT-00041-02.jpg)
3 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00041/WASDT-00041-03.jpg)

首藤文雄編(1886)『新体詩林・第 6 号』新体詩林社
2 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00042/WASDT-00042-02.jpg)
3 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00042/WASDT-00042-03.jpg)
4 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/WASD/WASDT-00042/WASDT-00042-04.jpg)

Webster, Noah(1885)*The Elementary Spelling-Book*, Nakagawa Company

2 (https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/img/SUMI/SUMI-00585/SUMI-00585-02.jpg)

(3)その他

関西詩吟文化協会(公社)「漢詩紹介」
(http://www.kangin.or.jp/learning/text/chinese/kanshi_C1_1_2.html)

常総市 HP「デジタルミュージアム」・「石下町史」
(https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/0821105100/0821105100600030/ht400060)

春原昭彦(1968)「『後藤清郎選集』(岩手日報社)『野村秀雄』(野村秀雄伝記刊行会)『新聞人 安藤和風』(秋田魁新報社)」日本マス・コミュニケーション学会『新聞学評論』第 17 号
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/shinbungaku/17/0/17_KJ00003738874/_pdf/-char/ja)

Byron, George Gordon, *Childe Harold's Pilgrimage*, Free eBooks: Project Gutenberg.
(https://www.gutenberg.org/files/5131/5131-h/5131-h.htm#link2H_4_0005)

国際地域学部国際地域学科　touch62930@yahoo.co.jp

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要
人文科学･社会科学編 第 3 号　2020

1886 as an Epoch-Making Year of “Shintaishi” : A Study of “National Literature” in Japan as a “Nation State”(17)

Tatsuya OMOTO

Abstract

The year of 1886 was an epoch-making year for the creation of "Shintaishi" (new style of Japanese poetry). During that year there was the appearance of "gunka" (military songs), the introduction of the "Iro/Koi" (carnal desires) theme, and the spread of devotees. In this paper, we will examine the second and third events of that year through the following readings: the *Shintaishi-rin* (collection of new style Japanese poems), *Shosei Shoka* (student's songs), two *Shintaishi-sen* (selection of new style Japanese poems) and the books edited by “Shintaishi-gaku Kenkyukai ” (Society for New Style Japanese Poetry).

Keywords : Shintaishi-gaku Kenkyukai (A Society for New Style Japanese Poetry), *Shintaishi-rin* (A collection of new style Japanese poems), *Shosei Shoka* (A student's songs), *Shintaishi-sen* (A selection of new style Japanese poems), *Sanpyo-Shintaishi-sen* (An annotated selection of new style Japanese poems)